

2年間の予定で開始した本研究は、世界的パンデミックにより予定を早めて帰国することとなったものの、概ね当初の予定通り進行することができた。研究課題は、北米における「ウィルダネス」概念の根拠を文学テキストから探り再定義する試みであり、文献調査と現地フィールドワーク、および研究者との交流を軸とした多角的なアプローチによって、研究成果を発表することのできる段階にまで来ている。具体的には、ネブラスカ州ネブラスカ大学リンカン校において Prof. Guy Reynold の元で Willa Cather の言説を先住民との関係性において考察する研究を行い、6月には 17th International Willa Cather Seminar (Shenandoah University, Winchester, Virginia)にて研究発表を行い、有意義なディスカッションをすることができた。そこで得られたのは、アメリカ作家の自然観を考える上で「移動」という側面を考慮することが不可欠であるという点である。とりわけ、19世紀から20世紀の所謂「世紀転換期」の作家たちは地域主義との関係で論じられることが多いが、実際には、この時期に急速に普及した鉄道、それに続く自動車の普及による交通整備により、西部・南西部・中西部・東部の移動がさかんに行われ、地域間の移動が促進されたことによる価値観の変容を導入することが、本研究にいつもの独自性をもたらすと見ている。

フィールドワークについては、アメリカの主要都市に加え、(中・南)西部の国立公園を周り、リサーチすることができた。カリフォルニア州からコロラド、ユタ、アリゾナを車で数週間かけて巡ることで、グレートキャニオンなどの世界遺産と負の歴史との複雑な関係の読み直しの必要を痛感した。具体的には、観光地となっている先住民保留地の調査により、観光地化やダム・電源開発などにより北西部および南西部の景観はかなり荒らされていること、とはいえ、先住民の収入を支えているそれらの産業を現地住民は必ずしも拒絶しているばかりではないこと、他方、観光客の問題意識もさまざまであること、などを感じることができた。そのため、単純化された議論ではなく双方の微妙な立場を踏まえたうえで、どのような環境論的な議論が可能か、思案しているところである。2020年3月よりオレゴン大学ユージン校に拠点を移し、コロナ禍に見舞われたが、現地で数ヶ月過ごした経験は、今後アメリカ文化を考える上で有益な経験となると考えている。